

日本近代音楽教育の創始者 伊澤 修二

「伊澤修二の生涯」を見ると、伊澤がまだ若かりし28歳であった明治11年から数年間の短い間に、日本の近代音楽の基礎を作り上げたことが分かる。

音楽教育の必要性を訴える

アメリカ留学中にメーソン氏から音楽の教えを受けた伊澤は、留学中の明治11年、28歳の時に、目賀田種太郎と連名で「学校唱歌に用ひべき音楽取り調べの事業に着手すべき見込み書」を提出、音楽教育の必要性を建言している。

「音楽取調掛」の任につき唱歌集を作る



資料1：小学唱歌（明治26年のもの）

明治12年、文部省に音楽取調掛が創設された。

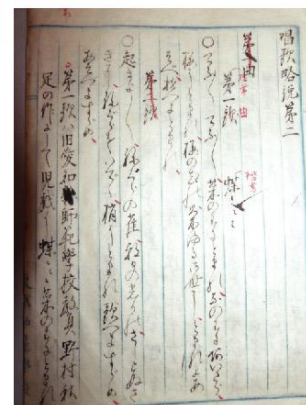
兼務を命ぜられた伊澤は、① 東洋と西洋の音楽の折衷 ② 国楽を興すべき人物の育成 ③ 諸学校に音楽を実施の三点を要務としてあげ、メーソン氏の協力を得て、楽曲を集め、それに日本語の歌詞をつけるという、唱歌集（資料1）の編纂作業に取り組み始めた。



伊澤修二の目指した国楽とは？

明治14年「唱歌略説」（資料2）が編纂出版された。その中には、現代でもなじみのある「君が代」「蛍の光」「蝶蝶」などの曲が入っている。解説の中で「童幼の心にも自ら国恩の深きを覓りて、之に報ぜんとする」と書かれているように、明治という天皇中心の近代国家の設立期にあたり、国民をいかに形成するかという視点から、音楽教育を考えている。資料1の歌唱集のページを見ても、道徳性が高いことがうかがわれる。

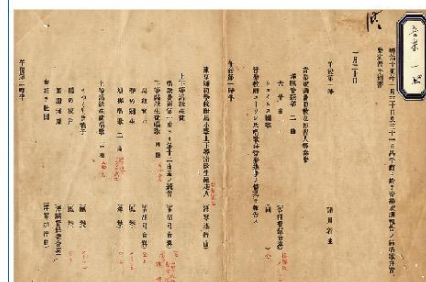
このことは、伊澤自身が作曲した「天長節」や「紀元節」などの曲が、戦前の学校で儀式などで歌われていたこととも関連していると考えられる。



資料2：唱歌略説 自筆原稿（蝶蝶の部分）

音楽学校をつくることを提案、初代東京音楽学校長になる

明治18年、音楽取調掛は、音楽取調所となり、伊澤は所長兼務となった。「音楽の功用を論ず」（明治18年）の中で、伊澤は「音楽の人心を感動するは、百般の技術よりもはなはだ適功なり」と述べている。明治19年、森文部大臣に音楽学校設立の建議を行い、翌明治20年に、音楽取調所は官立東京音楽学校（後の東京藝術大学音楽学部）になった。その初代校長に任命されたのである。



資料3：昌平館で開催された、演奏会プログラム

日本で初めて音楽会を実施

明治15年に、大演奏会が開催された。日本初の音楽会である。このプログラムが資料3で、もともになる自筆の資料も残っている。伊澤によって始まった音楽会の流れが、条約改正のため「鹿鳴館」で開かれた舞踏会にも結びついていくのは面白い点である。